

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2012年2月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：授業実践における日本語学習者の  
コミュニケーション観に関する研究  
－「ありたい自分」の実現を支援する教育を目指して－

申請者氏名：徳間 晴美

主査 細川 英雄 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 宮崎 里司 (大学院日本語教育研究科教授)

副査 小林 ミナ (大学院日本語教育研究科教授)

## 1. 論文の概要

### 1-1 論文の目的

本論文は、コミュニケーション主体の認識を重視する「待遇コミュニケーション」の理論的枠組みに依りつつ、「コミュニケーション教育の授業実践において、学習者の個別のコミュニケーション観に着目する重要性を示すこと」を目的とする。これは、授業実践において、学習者が主体的に場面や文脈を認識することや、学習者に内在する個々のコミュニケーション観が十分に捉えられていないのではないかという問題意識に基づきつつ、学習者が望む社会でのあり方を一人ひとり尊重して考えるべきだという立場に立ち、学習者とは、「自分のあり方」を主体的に方向づけながらよりよく生きようとする存在であるという根源的なところに立ち戻り、学習者の内面に目を向けてコミュニケーション教育を考えることを目指そうとする。

### 1-2 論文の構成と内容

第1章「序論」で、自分の研究の歩みを改めて見る中で気づいた、「ありたい自分」という視点を生かして考察した上で、第2章「研究背景と本論文の位置づけ」では、「コミュニケーション」を「やりとりとしてのコミュニケーション」と「人間的営みとしてのコミュニケーション」という二つの見方で捉える、本論文での筆者の見方を示している。

展開としては、自我形成とコミュニケーションの関係について考え、具体的には、ミード (George H. Mead) の社会的自我論に触れながら、自我は社会的に形成され、過去の経験や未来に広がる期待や願望に影響を受けるとする。そして、学習者が日本語でのコミュニケーションを通して社会とつながることで、学習者には、「日本語でコミュニケーションする私」に基づく認識が生まれるとする。また、他者の態度を通じて自己の内側を振り返り、新たな自分を創造する創発的内省性を帯びていることを押さえ、自己変容も主体的になされるものであることを指摘し、学習者は、このように形成された自我の下で、日々の選択や判断をし、自分らしさを保持しながら、人としての成長を遂げていると述べる。本論文がコミュニケーションの「待遇性」に着目する理由については、社会における「人とのつながり方」に関する学習者の認識が表れやすい側面であるからだと説明し、その上で、待遇表現形式が表す認識を具体的に見る。待遇表現形式は、尊

敬や配慮、丁寧さなど、気持ちの表現を豊かにし得る一方で、人柄や人間性に対する誤解や悪評価に直結しやすく、人間関係の構築に関わりが深いことも確認する。

第3章「語りから見た待遇コミュニケーション観の形成過程」では、学習者に内在する「待遇コミュニケーション観」の概念的 위치づけを示した上で、待遇コミュニケーション観の形成過程をインタビュー調査から分析し、第4章「敬語コミュニケーション観の変容過程の分析から見えた授業実践の意義」では、「敬語コミュニケーション観」の概念的 위치づけを示した上で、筆者が行った授業実践を取り上げ、学習者の敬語コミュニケーション観の変容過程を分析する。取り上げたのは、筆者が担当した2学期目にあたる敬語コミュニケーション科目（全15週）で、この授業実践は、1学期目で残された課題と、インタビュー調査で得た示唆を踏まえて組み立てたものである。3節まででその背景を記述し、4節以降でデータの分析および考察を行っている。

最後に、第5章「結論」として、研究全体の結果と考察をまとめた上で、本論文での問いに遡り、「一人の人」として「ありたい自分」を見据える学習者の姿を捉えられたことについて述べ、第3章で見た「待遇コミュニケーション観の個人化の方向性」や、第4章で見た「敬語使用不安の様相」、さらには、「敬語コミュニケーション観の変容過程」の分析結果を改めて見てみると、そこには、個別性を越える、人としての欲求が見られた。そこに、学習者の、「ありたい自分」という理想的自己像を見据え、実現しようとする姿を見ることができたと考えた。学習者の「個別性」を包み込むものとして、実は全体を覆うように存在していた重要な視点であり、これは、学習者が、成長しようとする「一人の人」として、「社会で生き、社会によって生きる存在」であるという、事実としての原点に戻るものであった。学習者には、「自分はどのような人でありたいのか」という問いを自分に向け、内省しながら自覚するという段階が必要であり、学習者が人として求める「ありたい自分」を引き寄せて考える場として、授業実践の場には意義があると述べる。

## 2. 論文の評価

本論文は、コミュニケーション主体の認識を重視する「待遇コミュニケーション」の理論的枠組みに依りつつ、「コミュニケーション教育の授業実践において、学習者の個別のコミュニケーション観に着目する重要性を示すこと」を目的とし、最終的には、学習者とは、「自分のあり方」を主体的に方向づけながらよりよく生きようとする存在で

あるという立場に立って、学習者の内面に目を向けてコミュニケーション教育を考えることを目指そうとするものである。

これは、授業実践において、学習者が主体的に場面や文脈を認識することや、学習者に内在する個々のコミュニケーション観が十分に捉えられていないのではないかという問題意識に基づきつつ、学習者が望む社会でのあり方を一人ひとり尊重して考えるべきだという立場に立つものだと言える。

この目的と問題意識そして結論は、これからの日本語教育を考える上で、きわめて重要な視点であり、筆者の教育実践の核をつくる研究として評価に値するといえよう。

授業実践者に向けて筆者の考えとして次の2点が提示されている。

- 1) 授業実践の早い段階から、現在の自分を取り巻く人間関係が、これまでの「やりとり」が重なった結果として構築されていることを認識させた上で、学習者個々のコミュニケーション観に目を向けさせることが重要であるということ
- 2) 授業実践者が、「授業を通して接する他者の存在」の有意味性が高まる場を創るよう、準備段階から考慮に入れて実践に臨むことが必要であるということである。

このことの理由として、「未来の私」を主体的に形成するにあたって、「コミュニケーション」と「現在の私」の関係を考え、これからどのような「やりとり」を重ねていき、どのような人でありたいと考えるのか、という問いを自分に向けることが大事であり、さらに、授業実践の場においては、学びにつながる気づきを得ることが大切であるため、その環境を作るために、特に、「心理的基盤の形成」と「対話を生む活動デザイン」という二つの点での工夫が求められるとしている。

以上は、第3章・第4章の自らの実践を踏まえた、いわば反省であり、本論文で必ずしもそのことが実現されているわけではない。この意味において、この研究は、今後の筆者の展望を述べる形で収束している。「ありたい自分をめざす」という自己アイデンティティにもかかわる重大な方向性を論じるには、哲学・心理学・社会学等の広範な先行研究の読み込みと理解が必要であり、そうした理論的基盤のもとに行われる教育実践こそ重要である。

この課題は、敬語や待遇表現にとどまる問題ではなく、広くコミュニケーションのあり方、また個人のアイデンティティにかかわる課題でもある。したがって、「待遇コミュニケーション」という枠組みから出ることが必要であると考えられるが、そのことへ

の言及がない。

筆者の指摘する「心理的基盤の形成」と「対話を生む活動デザイン」が具体的にどのような形で実現されるのかということこそ、日本語教育にとっての大きな課題であるといえよう。

また、敬語や待遇表現などの狭い範囲に限っても、「敬語形式を使うかどうか」「相手に敬意を表明するかどうか」といった形式と発話意図の関係や、場にそぐわない敬語形式の使用が結果としてあてこすりや皮肉などに解釈される発話の効果や含意など、社会における言語使用の多様な側面が十分に整理、記述されていないという問題点が指摘できる。なお、今後の研究の発展に向けて、学習者に焦点を当てたコミュニケーション観が中心であったが、「ありたい自分」の実現を支援する教育の影響要因を探るためにも、授業実践の分析項目として、やはり教師のコミュニケーション観や教育観も検証すべきではないだろうか。さらに、全体構成のバランスとして、4章のボリュームが130ページ近くになるため、章立ての工夫が必要ではないかと思われる。3章の「語りから見た待遇コミュニケーション観の形成過程」と4章の「敬語コミュニケーション観の変容過程の分析から見えた授業実践の意義」の記述から、「語り」と「授業実践」から見えてきた、学習者の「コミュニケーション観」を抽出してまとめることも必要であろう。

以上のような課題を残しつつも、時間をかけた実践とその分析によって、「ありたい自分」という概念を導き出し、そこから、自身の日本語教育がめざす方向性を明確にした点は、高く評価できる。よって、博士学位授与に値する論文として判断するものである。